

特別会員・賀川光夫教授追悼文

縄文・弥生時代の研究

— 中心課題、一貫して追求める —

加藤 知弘

賀川光夫教授の古希記念文集「賀川光夫・人と学問」の末尾に『賀川光夫先生の調査研究活動の航跡』なる年譜がつけられている。残念ながら一九九三年（平成五）一月現在で終わっているが、それまで同氏が手がけた遺跡調査は沖縄県を含めた九州全域に及び、遺跡の種類も石器、縄文、弥生、古墳、原始・奈良仏教の各時代にに及んでいる。



歴史と自然を学ぶ会講演会での賀川光夫さん（平成11年・大分文化会館で）

研究の精密な方法

ただ、同じ年表から、同氏が一貫して追求していた中心課題が「縄文期における農耕文化起源論」にあったことがわかる。

さらに最新の別府大学「史学論叢」に『縄文中期農耕論』を連載、この稿を縄文晩期農耕論につなげたいとも述べ、死の直前までこの問題を追求し続けようとの意欲がうかがえた。その期待された成果をみる事ができなくなり、残念としか言いようがない。

この意味で、最も重要な発掘調査は一九六五（昭和四十）、六六年に全国的に注目を集め、東大、九大、東北大などからも考古学者の参加を得て行われた緒方町大石遺跡第三、四次調査である。この遺跡の発掘調査は、賀川教授の縄文農耕起源論を有力にする出土器が得られただけでなく、国際的遺跡調査で著名な石田英一郎氏や泉靖一氏らの精密な発掘調査方法を学び得たことである。彼らも狩猟・採集社会から農耕文化社会へどのように転換していくのかを解明する重要な調査として評価し、協力を惜しまなかったのである。

今回歪曲(わいきょく)された賀川教授の発掘調査方法に関してであるが、大石遺跡調査のあと、炭化したモミが出土した唐津市汲田(くんでん)遺跡の日仏合同調査で、「スプーンを使用して、それこそ一センチずつはいでいく」というブリジオン氏(パリ大学教授)のやり方を「無駄であっても正しい方法」と、賀川教授は謙虚な姿勢で評価している。

学問への愛着の深さ

賀川教授の考古学者としての原点は、五〇年から五二一年の国東町安国寺遺跡調査に若手のリーダーとして参加したことにあったといえよう。現在ではもちろん、出土遺物の整理のため、盛夏の二カ月間、九大に泊り込む熱心さであった。

住居址(し)を取り巻く泥濘(ごう)を耕作田地としていた後期弥生時代の遺跡の調査が、農耕文化研究の出発となったのであろう。安国寺遺跡への愛着の深さが理解できるし、県内の文化財保存を熱心に訴え続けてきた賀川教授の考え方を生かす遺跡復元を国東町が行ったことはよろこばしい。

七七年に出版された「農耕の起源」では大石遺跡調査を核心部分に据えながら、農耕文化の起源の伴う土器、石器、埋葬、祭祀(さいし)住居の変化の有無を詳細に検討、貴重な発掘調査の経験と知見から具体的な推定を行っている。特に縄文後期から晩期にかけての遺跡から出土する黒色研磨土器が、中国西安東方の仰韶(ぎょうしょう)文化遺跡Ⅱ半坡(はんぱ)などⅡや、それに続く竜山文化遺跡から出土する黒陶の系譜で、ヒエ、アワと共に朝鮮半島経由で伝えられたものとの説は、中国や韓国の学者たちも注目されている。

広く東アジアを視野に入れて、縄文期を考えようとの調査研究活動を進めている時の、不慮の死であった。

(大分大学名誉教授)

当史談会が賀川先生に最後にお世話になったのは、一昨(こと)年秋(史跡探訪会)でした。宇佐八幡(みえ)の弥勒(みろく)寺跡や薦(こ)神社など笑顔で説明して頂いたのが忘れられません。ただただ、ご冥福を祈るばかりです。

史談会役員一同